

[私たちの留学体験記]

平岡 貴大：ケルン大学での留学体験記

私は2018年の春学期の6か月間、ドイツ西部のノルトライン・ヴェストファーレン州にあるケルンという町に滞在していました。この町には世界遺産であるケルン大聖堂があり、観光客も多く訪れるドイツの中でも大都市の1つとして知られています。しかし、首都であるベルリンと比較して、人が多すぎず静かで生活しやすかったです。

高校生の頃からドイツ語を習っていた私は、その頃からドイツ語だけでコミュニケーションが取れるようになることを目標に学習を続けてきました。また、大学に入りメルヘンに興味を持つようになり、専門性を高めたいと感じていました。それらの目標を達成するために留学を決意しました。本体験記では、ドイツでの学習、留学中にできた新たな目標そして友人との交流について書いていこうと思います。

留学中は語学コースで文法・聴解・発音に関して学んでいました。3月に行われるインテンシヴコースと4月からの本セメスター中に行われる通常コースのどちらにも参加しました。インテンシヴコース参加時に行われるテストの結果CEFR B1レベルのクラスに振り分けられました。日本でA2レベルを修了していたので、B1レベルに振り分けられ嬉しかったです。しかし、コースでは日本のようにただ座って受ける授業ではなく、積極的に発言が求められます。私の場合ドイツ語を話すことが苦手で実力が追い付かず苦労しました。長時間の聴解もあまり得意ではなかったので、慣れるまで時間がかかりました。結局、インテンシヴコースの最終テストは不合格となり、悔しい思いをしました。

本セメスターが始まってからは、ドイツ文学の講義をいくつか受講しました。やはり、ドイツ語で講義を受けるというのは非常に難しく、受講を辞退した講義もありました。講義後パワーポイントをひたすら家で見なおして勉強したり、現地学生と同じ条件で試験を受けるのが不可能と判断した講義では、教授に交渉しに行ってレポートに変更してもらったり、なんとか単位を取ってくることができました。講義のおかげで卒業論文の材料を見つけることのできたので、有意義な留学だったと言えます。

す。

そんな中、本 Semester に入ってから生活面に変化がありました。それはドイツ人の友人ができたことです。日本語学科の学生が交流パーティーを開いてくれ、そこで初めて現地生の友人ができました。タンドムパートナーもできたことで、日々のドイツ語コースに加え、授業で習わないドイツ語を知る格好の機会となりました。

そんな中、私の中で留学中の新たな目標ができました。それは、ドイツを再び訪れた時、「おかえり」と迎えてくれるような仲の良い友人を持ちたいという目標です。これを達成するには、自分から積極的に行動して、「ドイツ人になる」ことが最善策だと私は考えました。どういうことかというと、ドイツ人学生と多くの時間を過ごし、ドイツの文化に積極的に触れていくことで、現地生と同じようにドイツの生活に溶け込むことを目指しました。そうすることで、より早く現地生と仲を深めることができると考えたからです。まず初めに行ったことは、韓国語コースの履修です。ここでは留学生がない上に、現地生と同じ立場で勉強ができる機会だと考えていました。予想は見事に的中し、留学生は私 1 人でした。助けてくれる友達が 1 人もいない状況で、おまけに授業内の言語は英語で、テキストはドイツ語という少し特殊な形で授業が行われたので、現地生と同じ条件で勉強するのは大変でした。それと同時に、友人になる学生が増え、彼らとよく出かけるようになりました。そして話す力を向上させることに力を注ぎました。体感では、留學生活の 80% はそこに注力し、いつも外に出て勉強していたような気がします。

そうしていくうちに、出かけた時に友人が新たな友人を呼んでくれ、輪が広がっていきました。そして、ドイツ語を話す抵抗もほとんどなくなり、ドイツ語だけで話していても苦にならない時間が伸びていくのを実感しました。

「ドイツ人になる」ために、他にも色々行動してみました。例えば、授業の休憩中にリングを丸かじりする、チョコレートを 1 枚いつも持っておいてみんなで分けて食べる、乾杯する時は必ず相手の目を見る、時間ができたら芝生の上で転がって本を読んでみる（ドイツ語で言う *Sonne genießen*）、送別会では自分でケーキを焼いてみんなに配るといった、日本ではあまりしないけど、ドイツではよくあると教えてもらった

ことを意識して行うことで、ドイツ文化に馴染もうと挑戦していました。これを体験記に書くのは少し恥ずかしいですが、これらの経験は留学の充実度を高めたのは間違いないと思います。

これらが重なった結果、1番苦手だった話す力が、友達に4技能の内1番いいと言われるようになり、すごく嬉しかったのが未だに記憶に残っています。そして、最後にインテンシヴコースで不合格だったB1レベルのテストにも合格することができました。

そして、最終的に「おかえり」としてくれる友人ができたかという、2019年9月にドイツを再び訪れた時に多くの友人が「おかえり」と声をかけてくれ、再会を果たすことができました。6か月の留学でこの目標が達成できたのは、「ドイツ人になる」作戦の効果があったのかもしれない。

本体験記では、日本人学生とは関りを持たなかったように書きましたが、実際はそのようなことはありません。ケルン留学中、多くの日本人の、特に関東出身の友人に出会いました。専門講義を一緒に受講したり、生活面で困ったことがあれば助け合ったりしてきました。今もなお彼らとも交流があり、私が卒業後、就職で上京することが決まった時、彼らはいろんな情報を与え、助けてくれました。留学したら、同じ国出身の学生とは離れる方がいいということも聞いたことがあります。しかし私はそう思いません。自分で語学や専門の勉強に努力することを忘れなければ、日本人同士の繋がりは貴重な宝になると思います。

留学で語学力や専門性の向上を図れたのはもちろん、何より、多くの人と繋がれたということが留学における最大の成果のように感じます。

吉田和佳子：留学生活—最初から最後までずっと楽しかった

3年次の春学期、私は南ドイツのコンスタンツという町に留学した。題名にあるように、留学生活は最初から最後まで、ずっと楽しかった。孤独も感じなかったし、辛い思いも全くしなかった。それに、留学を終えた後に、「最初は辛かったけど・・・」みたいな話はしたくないと思って留学生生活を過ごしていたこともある。だからこのエッセイに何を書く

か中々決めることが出来なかった。私の留学生活には、起承転結のエピソードがない。そこで、どうしてそれでもずっと楽しかったのかをここに書こうと思う。

私は大学に入る前からずっと大学生になったら留学すると決めていた。小さい時から、言葉の違う人と意思疎通が出来ることが楽しくて、話せる機会があれば、学校のネイティブによる授業でも、海外旅行先の現地人にも、とにかく外国人がいたら英語を話していた。ずっとこれまで英語だけは成績も優秀だったし、英語の大会でも優勝したりして、今思えばその時の私の英語はペラペラの「ペ」にも満たない程度だったが、英語に自信があった。そのおかげで今は英語がかなり話せるようになった。

だから大学に入ったら絶対に英語を勉強しようと思ったのだが、新しいことがしたいと思い、ドイツ語を始め、ドイツ語専修に入った。英語を使って授業を受けるため、アメリカやイギリスの選択肢もあったが、あえて英語圏じゃない国に留学するってかっこいいと思い、迷わずドイツへの留学を決めた。正直、「ドイツにおったら勝手にドイツ語も伸びる」と思っていた。しかしいざ留学してみると、

—ドイツ人がいない—。

絞りだした結果これが私の留学生活の「起」にして「承」にして「転」だ。私は、専門の授業は英語で受けることにしていたため、授業を受ける友達ももちろん留学生。ドイツ語を勉強するためにドイツ語の授業に行っても、先生以外はみんな外国人。英語を勉強する時は、日本人以外なら英語が使えるけど、ドイツ語を話そうと思ったら、ドイツ人と会う必要がある。そんな当たり前のことに、私は気づいていなかった。

留学先の現地にいったら、どこかで自分が持っていたイメージとのギャップを感じる人は少なくないだろう。しかし、そのギャップを埋めるか、そのまま受け入れるかは人それぞれである。結論を言うと私は、ギャップを埋めた。具体的には、ドイツ人の友達を作るために、私は留学していたコンスタンツ大学の日本語の授業全部に出席した。中には40人くらいの大きいクラスもあったが、要約すると「私は日本人です。

友達になりましょう。」といった内容を下手なドイツ語でクラスに伝えた。変な顔をする人もいたが、30人ぐらいが集まり、日本とドイツの交流会を結成した。毎週金曜日、午後3時に集まってみんなでトランプをしたり、他愛のない話をしたり、ボーデン湖でピクニックをしたり。その交流会で出会ったドイツ人の友達のつながりで、かっこいい彼氏もゲットすることが出来た。

私の留学生活には実は、小さな起承転結がたくさんあった。今思うと、もしあの時私が何も行動を起こしていなかったら、「最初は辛かったけど・・・」の留学になっていた可能性だってある。そして間違いなく、今のかっこよく優しい彼氏とも出会えていない。ドイツ語は正直まだまだだが、留学での伸びはすごく感じている。

私は勉強する時、特に語学を勉強する時、坂の上で車の中にいる自分を想像する。何も勉強していない人は、エンジンが切れたまま。留学に行くことを決めた人は、そこでエンジンが掛かってアクセルに足をおいたくらい。だから早くアクセルを踏みこまないと、危ない。

私はドイツ留学を決めてちゃんとアクセルを踏んだから、「ドイツでドイツ人とドイツ語で話す」夢の留学ライフを送れた。でも正直、最近ではアクセルを踏んでいないせいで、留学で身に付けたドイツ語が少しずつ退化してしまっている。坂を滑り落ちるのは想像以上に速い。